

嫁ぐ日にちたりかねたむ我姉のくろかみにさす  
鼈甲のくし

水

齋藤れい

我が思ふことはあくまでなまましといふがごと  
くに水はひろがる  
幾日か知らでありつる地のしめりゆたけき見れ  
ば涙ぐましも  
夕されば鶏はおとなしとやのうちに三羽ならび  
て羽ばたきもせず  
さはやかに風ふきわたる坂の上に青水無月の空  
を見て立つ  
鳥なけば梢しげればことごとくに水無月旅のみち  
おもはしむ

ほそくく夏の夕の雨降れば物なつかしみかさ  
さして出づ

眼をそぢて心しづかに雨だれをきくがうれしき  
初夏のよひ

太陽のかけに立木のかげの織りみだれ初夏の日  
の暮るゝしづけさ

黒き眼の小鳥二つがまるまごにわれを見てある  
朝のよろこび

夕かげる太陽を背にあびて草しげば草のそこよ  
りつめたさの來る

おもひうみまぶた静にふたぐ時我が世の急にひ  
ろくなりけり

かにかくに眼さへとづればうら安き我が世なり  
けりこのまゝに居ん

移轉の日

ひさ葉

リンリンの鈴の音にむくりとはれ起きた、何故今朝はこん  
なに早く起きるのか知らず自分で自分を疑ふ、あゝさうさう  
今日は移轉の日だ、昨夜寝る時明日は早く起きて荷物の整理  
をするのだと、固く心を定めて寝たのだつた、昨日二ツの行  
李を整理して了つたので残るのは一つ、それを引つくりかへ  
して夫れ／＼處分する、化粧水の瓶の一寸形のよいのは取つ  
て置いたのが幾つも出る、不用の紙や一年の時のノートの、  
書きぬきなどは皆ペリペリ横破り、中には柔い紙もあるので  
勿体ないまで、チンと鼻をかんで捨てる、七時頃には大抵終  
つた。それから夜具、大風呂敷を室一ぱいに廣げて一枚一  
枚に包む、こんな事をしてる間にも此處を去る悲しさが時々  
堪へられぬ様に胸に迫つて來る、手拭かふつてハタキをかけ  
塵一つない様に掃除してこれが最後と鴨居まで一々雑巾をか  
ける、八時過ぎにはすつかり終つて了つた、あゝ、これでこ  
の二階からの見物もたしまひださ、窓際のればしまに凭つて

すぐ目の前の櫻や向ふの大椎の木を見飽きるまで見廻した、  
九月から見なれたこの景色、今櫻の花の盛りになりかけるの  
を後に見て、去らねばならぬ悲しき淋しさに胸が迫つて來る、  
私はまばしまにかけた手の甲の上に額をつけて、うつ伏して  
眼をさした。頭の中には去年の室がへの時のわびしさが、ひ  
ししと胸をついて來た、あゝあの淋しき悲しさを又繰り返  
返すのだ、いつか手の甲に生温い感じがするので、ふと顔を  
上げるさぬれてる、眼がしょぼしょぼとして來た、耻しくなつ  
て友に見付けられぬ様にさ、又うつ伏した。朝夕聞き馴れた  
豆腐屋の聲がする、いつもの犬が鳴く、あゝ、それさへなつ  
かしい。「どうしたの！」ふと友に呼はれて、顔を上げた、一  
年間同室で睦み合つた友、その友にさへ別ればならぬ、いよ  
いよ最後のお別れに好きなキントツでも喰べ様さ、友と二人  
岡野迄行つた、そして食事をすまして森川の寄宿舎を出る、  
玄關は出る荷入る荷入る山の様、長い間通ひなれた大學前の道  
をてくてく歩き乍ら、本舎につくさ此處も戦場の様、蟻が物  
を運ぶ様に蒲團や行李を二三人して、あつちにつつかり、こ  
つちに突き當りして運んである、赤城揚場の皆様さも久しぶ

りに一所に集つたので嬉しい。こつたらない、而しいつでも落ち付かぬ様子、夜の御飯まで働きつづけ、室のお掃除で大分遅くなつた、食後は前の部屋の友と二人、久し振で校庭を散歩した、幾日振りの散歩であらう、花壇も珍らしい、ニコライの塔もなつかしい、様々の思ひ出に思ひ亂れながら、自習の時までさまよふた、室に歸るに割窓のくちが引いてあつた、見るに十二月の事、あゝ、我々は三年になつたのだ、文科一部三年何某と書いて見ると、急に今迄よりは偉くなつた様な氣がする、あゝ、我々は三年生なんだ新入生を導く三年生なんだと、床の中で繰り返し繰り返し思ふと、今迄の月日が余り短くて嘘の様な感がある、而し事實なんだと思ふと何となく責任の重い様に感じながら、いつか疲れた身は夢の國へ引き入れられたのであつた。

### 新橋より新橋まで

新橋より奈良まで

旅に出るといふ事は單調な私達の生活にとつて

は一つの悦ばしい出来事であつた。

そして四月の新學期には入るともう旅行の事許り話し合つて居ただけれどさて愈々間際になると何だか人事の様な氣がして仕様がなかつた「荷物を纏めますから」と幹事にいはれて今更の様に吃驚して用意をしました位。

旅立の日は朝から雨が降つて居た。土曜日で授業は三時間しかない。「今晚立つなんてどうしたつて思へやしない」と皆が同じ様な事を云つて居る。時はこんな人々には何の頓着もなく沈黙の中に進行を續ける。夕方近く雨は稍小降りになつた。何か忘物をした様なぞしてどうしても思ひ出せない様な妙な氣分で七時半頃寄宿舍を出る。人の少い夜の電車に小さな包と小さな

悦とを抱へた人々の顔が並ぶ。町の灯はしつとりと落ち付いた空氣の中に快よい明るさを以て輝いて居る。銀座街頭の柳並樹がエメラルドの様な色に搖いで居る。いつも寄宿舍の窓から暗い海底の様な町を眺める私達にはたまにかうして見る都の夜の夜がどんなになつかしく思はれる事であらう。ステーションでは一時間余りも汽車を待たなければならなかつた。「漸く旅に出る様な氣がし出した」と誰か隅の方でいつた。この一時間は随分長いものであつた。やつと九時四十分といふ時が来て私達を汽車に乗せてくれる。「これが來年の三月だつたらどんな氣持がするでせうねえ」などと語つて居る人もあつた。汽車が進行し始めると皆が漸く安心

したといふ様な顔をした。話す、笑ふ、書く、讀む、眠る、此等の事が暫くの間續いたけれど十二時近くになると流石に疲れて唯轍の轟許りが闇にひびいて居た。二三時間も経つて殆ど同じ頃に目が覺めて又一しきり話のはづむ。何時の間にか自分も眠つた。ふと覺めるとあたりは白んで居る。時計は五時に二十分前、そつと窓を開けると冷たい朝風が心地よく流れ入る。一ト並びに五人寄り懸つて眠つた人の一人がふつと目をさますと後の四人が機械人形の様にパツチリ目を開く。見て居ると可笑しくてたまらない。○並ぶ○名古屋に着いたのは九時前であつた。櫻蔭會の方が澤山出迎へて下さつて嬉しかつた。お辨當